

筆

刷毛と筆とは共に獣毛が主要材料であり、その製法も製作品の用途にもまた共通の点があると思われるので少しばかり筆にふれてみたい。

筆は今より二千数百年前、秦しんの蒙恬もうてんという人がつくりはじめたものと伝えられているが、それ以前、文字の発明と同時に使用されたもので蒙恬は従来ものを改良して完全なものにした人である。と（事物起源考）が伝えられている。

蒙恬について

（故事成語）に

武の子、秦の将たり、威匈奴に震ふ、始皇遣して兵三十万を率ゐ、北の方長城を築かしむ、

とある。

蒙恬は秦始皇帝につかえた智謀豊かな將軍である。

昔中国北辺は、中国農耕民族と、それを侵略しようとする北方遊牧民族との対立がたえず繰り返えされていた。農業国中国を保護するため、剽悍な遊牧民族である匈奴の対策を本格的に実行したのが始皇帝であり、直接その衝にあつたのは蒙恬將軍である。

始皇帝は中国の周の末の乱世にうまれた英雄で、中国史上最大の皇帝だといわれ、阿房宮に美女三千をすまわせ日夜快樂にふけつたとあるが、この始皇帝が晩年不老不死の仙薬を蓬萊山に求めて徐福というものを派遣したと伝えられている。山東省沿岸を船出した徐福は紀の国の新宮附近に上陸し、その時がわが国七代の孝靈天皇七十二年（約二千百七十年前）といわれ、徐福がさがしもとめる不老不死の薬草をみつける事が出来なかつたので

始皇帝の怒りがおそろしく遂にこの地方に住みついたといわれる。新宮には徐福の墓がありこの地方の秦はたという姓の人は彼らの子孫だとつたえられている。

蒙恬は始皇帝の信任厚く三十万の大軍をひきいて北辺に遠征し匈奴を追い払い大中国の広い北境に山を越え谷をわたり延々と続く万里の長城を築いた。

万里の長城は古代文明遺物のなかでエジプトのピラミッドをしのぐ大土木工事といわれているのである。

この偉大な蒙恬將軍も、のちに始皇帝側近の不忠の臣、趙高の計におち長安の獄につながたのであるが、蒙恬の才能と功績は今に伝えられており、わが国にもその碑がたてられ、その偉大な功績がたたえられている。

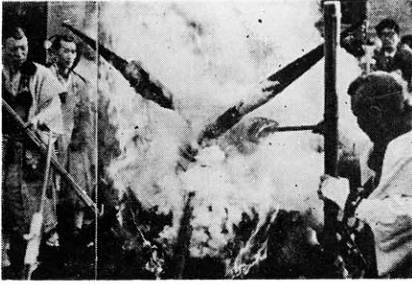
(蒙恬製筆) 事類全書に「或ヒト問ヒテ曰ク、蒙恬筆ヲ造ルト、然ルトキハ則チ古、筆ナキカ、曰ク非ナリ、古、筆ナキニアラズ、但ダ兔毛ヲ用フルコト、恬ヨリ始マルノミ、爾雅ニ、不律謂<sub>二</sub>之<sub>一</sub>筆、春秋ニ曰ク、夫子絶<sub>二</sub>筆獲麟<sub>一</sub>、莊子ニ曰ク、恬<sub>二</sub>舐<sub>レ</sub>筆和墨<sub>一</sub>」ト是レ其ノ来ルコト遠キヲ知ル、但ダ古ノ筆多ク竹ヲ以テシテ、今ノ木匠ノ用フル所口ノ木斗竹筆ノ如シ、其字竹ニ従フ、又、或ハ毛ヲ以テ能ク墨ヲ染メテ字ヲ成ス、即チ之ヲ筆トイフ、蒙恬ニ至リテ、乃チ兔毛ヲ以テス。……

とあり筆はその以前から存在したのであるが筆に兔毛を用いたのが蒙恬の発明によるものようである。また筆について

(故事成語)

積名に「筆ハ述也、事ヲ述ベテ之ヲ書スル也」

古今註に



筆 供 養 (正覚庵)



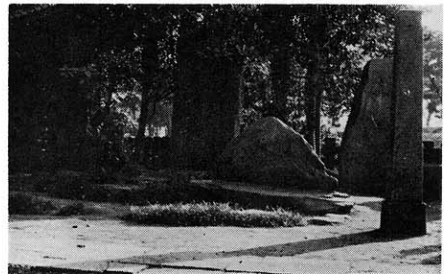
蒙 恬 将 軍 の 像



碑



蒙恬将军の碑のある三囲神社



蒙 恬 将 軍 の 碑

古ノ筆ハ竹ヲ以テシ木ヲ以テスルヲ論ゼズ、但シ能ク墨ヲ染メ字ヲ成ス、即チ之ヲ筆ト謂フ、秦六国ヲ吞ミ、前代ノ美ヲ滅ス、故ニ蒙恬時ニ称セラルルヲ得タリ、蒙恬ノ筆ヲ造リシハ即チ秦筆ノミ、枯木ヲ以テ管ト為シ、鹿毛ヲ柱ト為シ、羊毛ヲ被ト為ス、所謂蒼毫ナリ、形管赤漆ノミ、史官事ヲ記スニ之ヲ用フ、

史記に

恬取リ中山ノ兔毫ヲ造ル筆

世説に

王羲之ヲ得用筆ヲ法ノ於白雲先生ニ先生遺ルニ以テス

鼠鬚筆<sup>一</sup>又鐘繇張芝之皆用ヲ鼠鬚筆<sup>一</sup>

とあるので筆の毛に兔、鹿、羊、鼠、猫、犬の鬚など古い時代から使われていたことを知ることができる。

筆のわが国への渡来は今から千七百五十年程前応神天皇（第十五代）の頃、文字と共に百濟より伝わったといわれるが、それ以前の崇神天皇（第十代）の御代とも考へられるともいわれている。

筆の最も古いものが東大寺正倉院宝物中にあり、これは雀頭筆（どんぐり筆）で紙を巻いて芯にしたもので、穂は短く太く軸は梅羅竹、斑竹、などで、金、銀、象牙などで裝飾されており毛は（兔毛）と記されている。

大仏開眼の筆はやはり雀頭筆で天平勝宝四年四月九日大仏開眼に使用のもので（文治元年八月二十八日法皇（後白河用之）の識銘がある。

応神天皇時代、筆師というものがあつたといわれるがこれは韓人の帰化したものであろうといわれている。

奈良朝時代十人の官工の造筆手があつて図書寮の監督の下に筆を製作して全国に配つたとあるがこれらの雀頭筆は最初百濟から渡来したものとされている。

名僧空海が遣唐使として入唐中製筆の法を勉び大同元年唐より帰朝後大和国今井の里の住人（今の今井町）酒井名の清川に之を伝え従来の三韓式製筆と異なる長穂の唐式筆矛剛四管（真書、行書、草書、写書）を作らせ、弘仁三年六月七日第五十二代嵯峨天皇に奉献した。（性靈集奉献筆表一首）之が奈良筆の起源であり、又我国に於ける起源でもあり最古の文献であつて酒井名の清川は大和国高市郡今井町に存在していたが約二百数十年前、彼の後裔が奈良に移住し、以来製筆の中心は奈良に移り、書道隆盛と習字教育普及により全国一の生産高を持つようになつたと伝えられている。

大師といえは弘法大師とおもわれるほどの尊敬をうけてきた沙門空海は讃岐国多度郡の国造くにのみやつこの家柄である佐伯家に生れ、幼名は真魚、又貴物といひ延暦十二年二十才にして出家し空海と改め、みづから遍照金剛と号し、初め東大寺において仏教を学び、後大和国久米寺において大日経を得、ここに真言祕密教を感じし延暦二十三年遣唐使藤原葛野麻呂に従つて、最澄（伝教大師）（最澄は天台宗比叡山延暦寺を、空海は真言宗高野山金剛峯寺をはじめ兩宗派の大寺院を各所にたてる）と共に入唐し長安の諸刹を歴訪したのであるが、その頃支那の仏教界に彼に匹敵すべき人物なく、長安の青竜寺で真言密教第七祖といわれる、惠果阿闍梨より、その奥義を学び、第八祖たることを許されたという。

大同元年に帰朝して密宗を弘め、書とともに画をよくせることは世に広く知られるのみならず、土木工事、温泉、石炭、石油、の使用法、麦をまくこと、菓子菓子の製法まで教えたといわれている。空海は五筆和尚（能筆にて

両手両足、口にても書いた」ともいわれるが、書法正伝に韓方明が執筆の五法を戴すとあり、空海は書を韓方明に学んだと云ひ伝えられるので、この執筆に到達したるものかともいわれている。また当時の三筆（嵯峨天皇、橘逸勢、空海）の一人とたえられ、筆には特に深い関心を持ち、在来の雀頭筆にあきたらず、身を以て製筆法を勉じ、書体に適する各種の筆を作らしめたその事績からみて、巷間伝えられる

弘法筆を撰ばず

との譬には矛盾を感じるのである。

筆の製作には高度の技術を必要とし現在も書道に用いる筆の製作にあたつて主要材料たる毛質のその厳密な選定とその製作の入念さ、書家の希望によつては正倉院御物の筆同様、芯に紙を入れたものと同じ調子のものなども作られているのであつて、その使途に応じての筆の選定は当然の事であり、これらの観点よりむしろ

弘法筆を選ぶ

との表現が適當であるように考へられるのである。

筆毛の選定について白樂天の詩（紫毛筆）で

千万毛中選一毫（千万の毛の中から一本の毛を選ぶ）

とある。

筆の量産で知られる広島県製筆の起源は熊野町であつて熊野筆と呼称し其の沿革は左のように伝えられている。

古老の伝えるところによると、戦国時代の頃は戸数百戸未滿で野武士の性格を持ち乍ら幼稚な農法により猫額

の土地を耕作して居た事が想像される。後次第に人口が増加し加へて農民を搾取する徳川幕府の庄政によりこの一寒村での零細農では到底生計を支える事が出来ず、芸藩通誌の中にも見える「農余行売の者あり」の言に違はず、他地方へ出稼ぎする者が少なくなかつた、随つて屈強の男子は多く春夏の頃より大和国吉野地方へ行つて高野山等の登山者の強力や紀州熊野川の木材運搬、木挽等の稼業に従事して秋になつて帰国するのが常であつた、その帰途には必ず奈良地方に産する筆墨を仕入れ冬季の頃近隣諸方に行商するのが例であつて筆墨商人の往来が頻繁であつた事は想像に難くない。

この様にして筆墨商人の数が次第に増加し本町を中心とする毛筆の生産も漸次そのきざしを見せて来たのである。

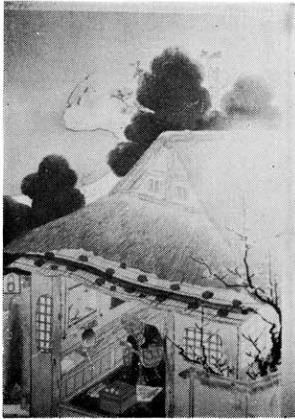
たまたま弘化三年の頃当地住人井上治平（又は井上弥助）十八才の時広島島の研屋町に在住して居た藩主浅野家の御用筆司吉田清蔵について製筆の法を習得し帰村の後村民に之を伝え、又同じ頃当地の人音丸常太（又は乙丸常太郎）は摂津の国有馬より製筆の法を習得帰郷し、その技術を村民に伝授して両者共に時所得、之に師事する者門前市をなすの盛況を呈し、先にのべた筆墨商人の往来と相俟つて次第に斯業の発展を見たのである、兩人に対する村民の感謝の念は次の歌によつても知る事が出来る。

かきしるす筆のいのちの毛つきるとも

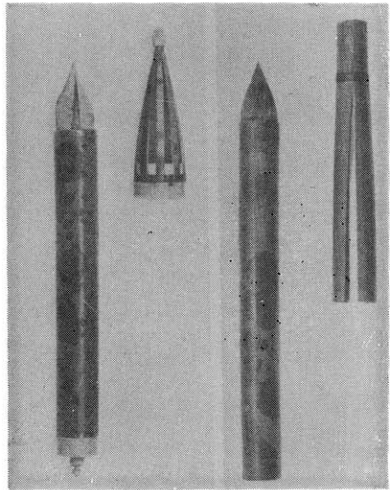
つきぬは君がいさをなりけり

ついで明治五年学制が發布せられて教育は全国に普及し毛筆の需要は俄に増大し明治十年東京で開催された内国勸業博覧会に西尾平助が出品した毛筆製品はその優秀さを以つて入賞し熊野筆の名声大いに広まり、爾來製

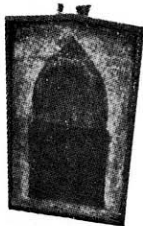




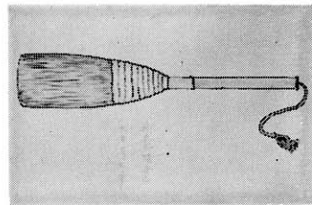
筆師(川越喜多院蔵)  
(狩野吉信筆)



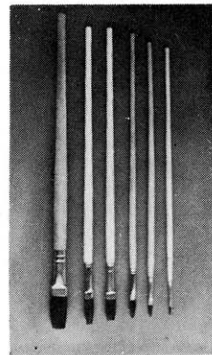
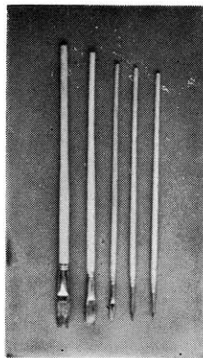
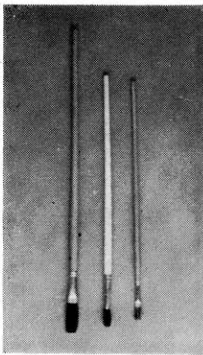
正倉院の雀頭筆



江戸時代の筆の看板



福本因幡守作  
大名号大筆



画  
筆

筆業者は斯業に益々励んだのである。この様にして熊野筆のその生産量は逐次上昇し昭和十一年には七千万本の生産を誇つたが昭和十二年日支事変勃発以来事変の拡大、又大東亞戦争への発展と共に応召、徴用等の為め次第に生産は減少し、終戦と同時に小学校に於ける書道科（習字）の廃止に伴ひ終に昭和二十二年には壹千五百万本まで低下した、その後昭和二十四年度に広島県の指導と援助により画筆生産に転換する者多く、尚その後小学校に於ける毛筆習字の逐次復活（国語科の中の毛筆習字で独立科目でない）の為め逐年増加して昭和二十九年に於ては推定

毛筆 四千万本

画筆 二千万本

となつた。

これは全国生産比毛筆九割、画筆六割の生産量であつて広島県に於ける特産物中重要部分であるけれども全国的には熊野筆、熊野画筆として知られていないのは遺憾である。

その原因は奈良、大阪、東京等に於ける同業者へ無名のまま出荷され、夫々その同業者の製品として全国的に販売されて居る為めである。

とある。

越後の筆の起源は安政年間清水彦平という人の発意により作り始められ、その頃貧乏藩と云われた村松の堀藩主が歴史上有名な米沢の上杉藩主の施政を学んで、勤儉質素の氣風を奨励し、専ら節約を奨め、家中の内職として筆や傘などを生産させて貯蓄を奨励して居つたのが、明治維新で禄を離れた村松藩士族の多数を今町（南蒲原

郡)に移し、だんだん規模が大きくなり大小工場併せて従業者約千五百人位と推定され年間生産約七百万本で、その内油絵、水彩画用の筆が約一割から二割含まれており金額にして合せて一億円に達し越後の大きな産業であるばかりでなく日本の輸出商品として一役買っているのであつて本県産業の大きな地位を占めているのである。と新潟郷土産業放送は報じている。

大都会に於ける筆製作者は東京を中心とする関東地区に約百名、大阪地区もまた百名位と推定されている。画筆については之を必要とする西洋画について

(事物起源考)は

油画は西洋で十五世紀頃フランドルの画家によつて完成されたのである。とあり日本ではじめて油画が伝えられたのは徳川初期だといわれているが詳細は不明で、一説に支倉常長はせくらつねなががローマから持帰つたものともいわれている。

支倉常長はせくらつねながは伊達政宗の家来で、徳川家康の内意をうけた主君からスペイン領メキシコとの貿易開始のためスペイン国王ローマ法王のもとに派遣された。幕府海軍の船大工が造つた帆船で慶長十八年十月二十八日陸奥月浦つきのうらを出帆、九十日かかつて太平洋を横断し、翌年一月二十五日メキシコ西海岸のアカプルコに上陸した。常長は上陸地からメキシコ東岸に出て大西洋をスペインに渡りローマに行き、帰りはインド洋からフィリッピンを経て七年の大旅行ののち帰国した日本最初の地球一周旅行者である。

有名な勝海舟のオランダ製汽船での太平洋横断(万延元年正月、この時青年福沢諭吉も軍艦奉行木村摂津守の従者として渡米した)に先立つ事二百二十五年前である。

洋画は屢長年間キリスト教の布教とともにはいつてきたもので、天草一揆党の山田惣右衛門が西洋画を学んだ者の初めといわれ、また長崎人生島三郎左衛門が南蛮人から西洋画を学んだともいわれているが、西洋画をはつきり研究したのは天明―寛政の頃、平賀源内、司馬江漢らが長崎蘭人について油絵を学び、はじめて日本でも油画が書かれたのであるというが、司馬江漢について「日本画沿革史」は江漢長崎にて

親しく蘭人につき油画を学び、文和の始め錦帯橋を油画に写して浅草観音の堂内に掲げしかば画法の珍らしきたために、人その下に蝟集すれども、敢えて其の可否を言ふものなかりしに、諸僧の中、説をなすものあり、「清淨の伽藍に穢らはしき蠻画を掲ぐるは其の清淨を汚す恐れあり」とて遂に其額を取除けたりと云へり。

西洋諸国を南蕃と号し、之れを卑めたるが為めに時勢已に此の如くなれば、當時は畜に、好模本のなかりしのみならず、固より西洋の油彩の具もなく、紙筆もなかりしが故に、江漢の熱心なるも、之を用ふる能はず、於是乎、又此等のものにも百方苦心して我国従来の彩具を用ひ、彼の如くならしめんとて、遂に其彩を以て色彩の原料となし、之れに種々の彩具をとり合せて密陀油にて之を解き、光線、遠近等の諸法を模写したるのみならず絹を以てキャンバスに換へ、紙を以てボードに換へ、而して我毛筆を以て画きしなり、是れを以て、江漢の画は今日の西洋油画より見る時は、日本画にもあらず、西洋画にもあらず、一種奇恠なる画なれども、其当時に在りては、又之を西洋画と云はざるべからず……於是彼の苦心の結果は一時洋画の師表となり、葛飾北斎の如きも江漢に就いて洋画を問ひ、以て大いに其技能を高め、其他歌川豊国安藤広重等の如き江漢の画法によるもの少なからざりき……江漢は文政元年

十一月二十一日七十二才で歿している。

とあるので真の洋画は明治になつてから発足したものである。明治三年川上冬崖が横浜在住の英人について学び、明治六年には上海で油絵を習つた高橋由一が帰朝、又横山崧三郎が同時代にロシア婦人から油絵を習つた。

明治九年風物の自然を写した油絵は、当時浮世絵風の絵画よりほか知らない市民の興味をそそり、明治九年十一月、横井綱五郎は新橋竹川町に「油絵縦覧所」を設け、下足手数料として金一錢を取つた。とある。

画筆のわが国での製作はフランスから渡来したものを見本にして製作されたもので明治十年以後の事であろうと推定されている。

筆の製作にはその用途に応じ剛、硬、柔、軟を配する高度の技術を必要とし、良い筆を作るためには東洋独特ともいふべき書道にも、また絵画などの芸術にも、無関心ではいられないばかりでなく、高級品は筆そのものが芸術品であると思うのであるが、筆は刷毛同様使うだけ使つて捨てられてしまふ運命にあるので、東大寺正倉院御物中に見るような古い時代のもは極めて珍らしく最も貴重な存在といふべきであらう。

江戸時代に作られた筆は当時大名が用いたというものが少しも損ずるところなく保存されているのをみる事があり、東京世田谷奥沢九品仏浄心寺の寺宝で珂碩上人かせきが使用したという大名号大筆は今から二百八十年程前に作られたものとあるがそのスス竹の軸に

武砦江戸室町二丁目

福本因幡守作

と朱入りの銘が彫刻されており、毛の部分の直径約四寸、毛の長さ約九寸程の大筆で、毛は先のある尾脇で芯は株柁で作られており破損した箇所もあるが毛の部分は少しも損じていない。

この筆は毎年一回、八月十六日に此の筆で書いた大軸や他の寺宝と共に観る事が出来る。

また支那春秋戦国時代や漢時代の刀筆や秦時代の毛筆（鹿毛―羊毛製）など中村不折画伯蒐集といわれる古いものが台東区上根岸の書道博物館に陳列されている。

使い古した筆の供養のための筆塚は各所でみられるが京都東福寺、正覚庵で筆供養が行われる。筆毛を提供する動物の霊に感謝し動物園へお稚児達が出かけて、うさぎや狸などにごちそうを与える。筆みこしが練りあるく、筆塚の前で護摩がたかれ、僧侶や行者の読経のなかで各所から奉納の古筆数千本が浄火に投じられ厳かな筆供養が行われる。また東京都墨田区向島の三囲神社内に前記の蒙恬將軍の碑があり、毎年四月十六日に筆に關係ある人達によつてその碑前に筆祭りが行われる。

#### 碑 文

於惟將軍猛厲無前威震匈奴

氣懾然城塹万里絶地迴天

百世之利何惜一搢將軍典学

文翰翩翩懷彤管漆書未便

將軍先覺思幽入玄中山之毫

既柔且円束縛有加濡染如椽

封之管百祀不遷何人徵之

昌黎茂先、高大寿楨七葉衍伝

企想先型仰高鑽堅求將軍像

幾四十年、属為撰記大書深鐫

蓬萊之嶼、神山之顛、風雨不渝

古見縣縣

荊州揚守敬撰

并書

遵義黎庶昌

篆額（駐日第一代公使）

光緒八年十月

穀主

碑文の意は

蒙恬將軍は武勇無類であつた。その武勇の事は外民族匈奴に畏服された。

意氣は非常に盛んで險惡なる辺境に渡つて万里長城を築き、後世に遠久なる安全と便利をのこす。これだけの人だ、どうして匈奴の一撃をこわがろう。

將軍は又學識も文章も秀れて、當時はまだ紙と筆がないので文章を竹片に刻むのを非常に不便と感じた。將軍は又人より先覺の頭腦を持つており、考えることは非常に奥深いものでした。

中山（地名）に産する毛は非常に柔かく且つ円潤で、これをうまく束にして縛り墨をしめして字を書くとき椽のように均整がとれてうまく書けます、（即ち筆である）それを將軍が発明したので秦始皇は管城を彼れに与え

た。又彼の功績を讃えるために、人民は絶えず彼を祭つた。

彼の事は。唐の韓昌黎や後漢の辺茂先の文章の中にその偉大さや寿命の長いことを述べている。昌黎が七代の史書に彼の事を伝えようとして高讜堅という人に依頼して、彼れの事蹟を求めて約四十年の事業を撰記に録されてゐる。又字を大きく且つ深く逢萊附近の小島の山頂に彫刻してあるので、風雨にも破滅されなくて遠久に長くのこつてゆくであらう。

光緒八年十月

とありこの年号は約八十年前になる。

筆は墨で使う文字筆、絵筆以外に

ペンキ筆

面想筆

画面筆

蒔絵筆

点付筆

線引筆

紅筆

眉筆

レンズ筆



鶏毛筆  
薬筆

など各種あつてこれらに使用する毛も品種に応じ羊毛、馬毛の外、狸、鹿、犬、テン、リス、兎、人毛、化学織維、猫、イタチなどの毛が使われる。